山口逸彩人

やまぐち「いさいびと」

yamaguchi isaibito

きらり輝く山口の

［山口逸彩人］

NPO法人「みらいプラネット」理事長 有富 健さん

原動力は「復活力」

［column］ 原口陽子の薬膳コラム

Lisa's Photo Gallery

vol.03

yamaguchi isaibito

2019. SUMMER

山口逸彩人

やまぐち［いさいびと］

原動力は「復活力」

NPO法人「みらいプラネット」理事長●有富（ありどみ） 健（つよし）さん

大学卒業後、就職して、公私共に順風満帆な生活をしていた有富さんは、ある日突然、難治性血管奇形という難病を発症しました。それからは生活が一変。長い闘病生活の始まりです。

今では、完治は難しいと言われる病気との闘病を続け、働きながら、「みらいプラネット」理事長としての活動を精力的に行っています。

突然の発症とハラスメントに悩む日々

――難治性血管奇形とは、どんな病気ですか。

有富　血管がねじれる病気です。血管がねじれると、当然血流が悪くなり血液が体に行き渡らなくなります。水を撒いている時にホースがねじれると、水が出なくなりますよね、それと同じ現象です。人によって違いますが、様々な症状が、痛みと共に現れます。

――有富さんの場合は、どんな症状が出ましたか。

有富　私の場合は、最初は腰の激痛でした。ちょうど県内のイベントにスタッフとして参加していた時に突然、腰に激痛が走ってひっくり返ってしまいました。それが２００１年、発症の瞬間でした。

当時はまだ血管奇形という病名がなく、救急搬送された病院でもぎっくり腰と診断され、治療をしました。でも腰の痛みは治らず、それどころか痛みは増す一方で、とうとう歩けなくなり車椅子で移動する始末になりました。

――闘病生活の始まりですね。

有富　全国の病院を巡りましたが、どこに行っても病名がわからずに入退院を繰り返す毎日でした。わらをもつかむ思いで、良いと言われたことは何でもしました。変な宗教まがいのものに頼ったり、温泉療法を試したり。若い頃は大食漢で力自慢の私でしたが、歩くことも、荷物を持つことも、食べることもままならず、辛く苦しい毎日でした。しかも病名がわからないということが、余計に苦しくて。せめて自分が何の病気に罹っているのかがわかっていれば良かったのですが、得体の知れない怖さと不安がありましたね。

――職場でもハラスメントに悩まされたとか。

有富　はい、入退院を繰り返していたので、休むことも多かったのですが、何しろ何の病気かわからないので、詐病だと疑われて上司からいわれのないいじめやモラハラ、パワハラを受けて…。退院して小康状態の時に出勤しても、思いやりのない上司のせいで、職場は地獄のようでした。冷たい目で見られ、言葉の暴力の怖さを嫌というほど知り、精神的にボロボロでした。

――辛い日々でしたね。

有富　ただ、救いもありました。変わらない態度で接してくれた友人たちと過ごすひと時は、辛かった私の心に灯をともしてくれました。どんなに辛い状況でも、理解してくれる人がそばにいてくれるだけで、心が救われるということを、身を持って知りました。

一筋の光明

――発症して九年目の２０１０年にやっと病名が判明しました。

有富　その時は全身に痛みが広がっていましたが、札幌の病院で「血管奇形」と病名を告げられ、「これだけひどい痛みをよく我慢して、頑張ってこられましたね」という医師の言葉に涙があふれ、目の前に一筋の光明を見た思いでした。今まで私を苦しめてきた正体は、これだったのだ。得体の知れない苦しみからやっと開放される。そして、痛みや苦しみを理解してくれる医師がここにいる。心の底から大きな安堵がこみ上げて、あらゆるものへの感謝の念がわき上がってきました。

――待ちに待った瞬間でしたね。

有富　血管奇形は完治が難しく、一生医療管理が必要な病気ですが、病名が判明し、手術を受けて、それまでのわけのわからない闘病生活にも一区切りつきました。その後も闘病生活は続いていますが、病名がわかったことで、精神的にはとても楽になりました。

浦島太郎状態で荒れた日々

――そして、何度目かの職場復帰を果たされました。

有富　手術を受けリハビリを続け、スタスタと歩けるようになり、「今まで休ませてもらった分、頑張ろう！」と意気揚々と出勤しました。以前のモラハラ上司のいる部署ではなく、新しい部署になっていましたが、同僚たちは私が働きやすい環境を整えてくれていました。彼等の心遣いが嬉しくて、感動しました。

撮影場所／山口情報芸術センター

yamaguchi isaibito

しかし、すぐ落ち込む羽目になってしまって。何と浦島太郎状態の自分に、気がついたのです。かつての同僚や後輩たちは地位が上になっており、私だけが時が止まっていました。仕事内容もわからないことだらけ、おまけに何をするにもパソコンを使うので、ついていけないと痛感しました。

――取り残された気になったのですね。

有富　そうですね、取り残されたという孤独感に苛まれて、次第に殻に閉じこもって、疎外感にも襲われました。自暴自棄になり、かなり荒れるようになりましたから、当然周囲の人間も離れていきました。でも、このままではいけない、何とかして自分を救いたい、生きる希望を取り戻したい、そのためにはどうしたら良いのか、考えました。

――その方法は見つかりましたか。

有富　葛藤だらけの自分の心を救うために、また、ハラスメントをする人の気持ちを理解するために、心理学を学びました。通信制の大学で、年に十数回東京に通いながら、ひたすら学びましたね。久しぶりの勉強と、奥深く面白い心理学に没頭しました。

――それで救われましたか。

有富　多角的な考え方を持つことを学ぶうちに、私の考え方も変わり、孤独感からも徐々に開放されました。もっと早く心理学のスキルを学んでいたら、ハラスメントに悩んだ時も、苦しまなくてすんだかも知れないと思いました。そして、苦しみと闘っている人や傷ついている人たちの役に立ちたいと、カウンセリングも学びました。

今まで知らなかった知識を吸収することが楽しく、忙しいけど充実した毎日でした。自分の未来は自分で変えてやると、貪欲に学び、認定心理士・行動心理士・産業カウンセラーなど、数々の資格を取得しました。

復活力

――それは、大きなターニングポイントになりましたね。

有富　多くの資格を取得したことで、少しずつ自信を取り戻し、真っ暗だった未来が明るくなりました。これからは過去を振り返らず未来に向かって、与えられた使命を全うしよう、と決意しました。心理学を学んだことは、私の復活の原動力「復活力」になったのです。

――与えられた使命とは。

有富　世の中には血管奇形も含めて、病名がわからないまま苦しんでいる人が大勢います。また、様々なハラスメントに悩んでいる人々、難病患者、障がい者やＬＧＢＴ、身近なところでは妊婦さんや子どもなど、社会的弱者であるが故に横行する偏見や差別に傷ついている人たちも大勢います。いじめによる自殺も後を絶ちません。そのような、いわれのない偏見や差別、誹謗中傷を世の中からなくし、全ての人が生きることに喜びを見いだし、笑顔あふれる社会を作るために役に立つこと、それが私の使命だと思っています。

――使命を全うするために、どんな行動を起こしましたか。

有富　まず、難病指定のために活動する会を立ち上げました。血管奇形は一生医療管理の必要がある病気ですが、国から難病指定されていないので、病気のことを広く啓発し、難病指定を求める活動をする目的で立ち上げたのです。隠れ血管奇形患者さんの掘り起こしをするのも、目的でした。

みらいプラネット活動

――それが、現在のＮＰＯ法人「みらいプラネット」の前身ですね。

有富　初めは血管奇形患者を救う目的だったのですが、全ての人のために笑顔あふれる共生社会を実現するという目的で、「みらいプラネット」という名称にしました。

――「みらいプラネット」はどんな活動をしていますか。

有富　各地のイベントに出向いての講演・啓発活動や、病気・ハラスメント・差別などに悩む人の個別のカウンセリング、治療に行く患者さんの交通費負担などの活動をしています。

病気で得た宝物

――今後も闘病生活がずっと続くということは、苦しいでしょうね。

有富　最初は下半身だけだった血管奇形が今では全身に現れて、おまけに余病も併発しているので、確かに身体的にはいつも苦痛と闘っています。でも、精神的には、とても穏やかで幸せになりました。発病前は出世欲に燃えて、将来も約束されたような錯覚に陥っていましたが、今ではそんなことはどうでも良くなったのです。

病気になって多くの方との出会いがあり、人との絆の大切さがわかり、人の心の温かさを知り、弱い立場の人の気持ちもわかるようになりました。これは、病気になったからこそ得られた、大切な宝物です。

――悩んでいる方たちに言いたいことは。

有富　人生には、多くの挫折や障害が待ち受けています。でも、それに負けることなく自分を信じて立ち向かっていってほしいと思います。自分の尺度で周りを見ないで、お互いに尊重、尊敬しあって生きていきましょう。そして笑顔あふれる社会を、みんなで作っていきましょう。

何かに悩み苦しんでいる人がいれば、私は飛んでいって相談に乗ります。皆さんの笑顔のために。

今後も闘病生活が続く有富さんは、今ではどんなことにもプラス思考。何があっても自分で自分をあきらめなければ、大逆転のチャンスはあると言う。「生きることは覚悟である」とは、挫折を味わった有富さんだからこその言葉だろう。

多くの余病も抱えながら、「みらいプラネット」の活動のために九州や東京に赴くこともあり、多忙な毎日を過ごしている。信念を貫く孤高の人である。

みらいプラネット活動

ＦＭ山口出演

山口逸彩人

やまぐち［いさいびと］

人は誰でも「きらり」と光るものを持っています。
その「きらり」を発揮することによって
人は異彩を放ち、逸材となり、輝きを増していきます。

そのような意味を込めて、逸材であり異彩を放つ人を
「逸彩人」と名付けました。

山口の多くの「逸彩人」の「きらり」に
スポットライトを当てて
皆さまにお届けしていきます。

山口逸彩人　vol.03［2019.SUMMER］

2019年夏 発行［季刊発行］無料配布 ○発行元／Office Wing 防府市仁井令727-8 tel.090-9062-4554
○発行責任者／徳田 晴美 ○文／徳田 晴美 ○写真／東子谷 梨沙 ○デザイン／武田 祐治